Osaka University Knowledge Archive

Title	竹の音楽文化 : 現代日本における諸相と展開の可能性
Author(s)	牧野, 淳子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45701
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【26】

氏　　名	牧野（藤井）淳　子（まきの ふじい あつこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９１３８　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**竹の音楽文化－現代日本における諸相と展開の可能性－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　根岸　一美 （副査） 教　授　天野　文雄　　助教授　伊東　信宏

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、竹を素材とした音楽文化の諸相を総合的に究明し、新たな「竹の音楽文化」の可能性を探ろうとする研究である（目次、はじめに、本文、結語、参考文献。全 186 頁）。本文は４章、164 頁からなる。「第１章　日本における竹の活用と竹文化」では、竹の植物学的な特徴や生態ならびに世界の竹の生育分布を示し、生育地域における現代までの活用の変遷や人々の生活との関わりを辿り、民俗行事や文学作品等、文化における竹の役割と位置づけを概観し、伝統音楽およびサウンドスケープにおける竹と音との関係について考察している。「第２章　竹楽器と竹の素材性」では、アジア各地に存在する竹楽器の構造・機能・奏法を精査し、それらの成り立ちを、「竹の素材性」との関係において検証している。素材としての竹のあり方が有する「中空性」「節を持つ」「弾力性」「割裂性」等の特質が、楽器としての様々な機能を実現しうることを指摘し、また、人々が竹に触れ、そこから音を出すために試みたであろう原初的な行動として、「打つ」「搗く」「吹く」「揺する」「はじく」「撓らせる」「共鳴させる」「その他」の分類を示し、本題への基礎となる考察を提示している。ここでは、グレイムの楽器学研究に依拠しつつ、竹が世界の楽器分布図に影響を与えるほど、楽器の素材として中心的な位置を占めてきたことを示す一方で、アジア各地に見られる竹の打楽器が、今まで日本では発展を遂げることがなかったことにも触れている。「第３章　現代の日本における〈竹の音楽文化〉の諸相」では、以上に見た、竹がもつ楽器の素材としての可能性が、現代の日本においてどのようなかたちで具現しているかを、学校教育および一般社会の二つの場において検証している。まず、学校教育の音楽科授業においては、フィリピンのトガトンをはじめとする、アジアの竹楽器による音楽に示唆を得た「音楽づくり」の活動が、徐々にではあるが浸透しはじめていることを挙げ、その効果について論じている。次いで、1980 年代後半から始められた、新たな複数の「竹を素材とした表演芸術」のグループの活動について、発足からの経緯、編成、作品、活動内容を紹介し、そこから、これらの「竹の音楽」集団を成り立たせた背景、各グループが目指す竹の音楽とアートマネージメント、竹を素材とした現代の表演芸術の特質について論じている。そして最後の章である「第４章　新たな〈竹の音楽文化〉創造の展開の可能性」では、竹がさまざまに活用されうる理由が、竹自身が持つ「半完成性」にあると考えるとともに、竹には、人々の活動を様々な領域・分野・種類などへと分け隔てている「枠組み」を解体する力が内在していることに注目し、その上で、「竹の音楽」や「竹の音楽文化」が今後どのように展開されうるかを、申請者自身による「アート・プログラム」の実践例をもとに述べてゆく。さらに、竹や竹林に関わる多様な分野の人々とのコラボレーションや、「竹炭文化創造」「里山文化再生」などの構想についても具体例を示

し、現代の「竹の音楽文化」からのさらなる展開への提言として、本論文の結びとしている。

論文審査の結果の要旨

竹と音楽といえば尺八や篠笛が思い浮かべられるが、本論文は、竹と楽器との伝統的な限定された関わりから脱却し、竹を用いての新たな音楽活動がどのように展開されうるかを、実践例の報告を交えながら論じた研究である。音楽教育に携わっているなかで、身近な素材である竹から楽器を創り上げ、活用してゆく、という課題が研究の発端に置かれていたとのことであるが、そうした動機を保持しながら、あらゆる面から「竹と音楽」を論じることによって、楽器学、教育学、社会活動に関わる総合的調査と考察を提示しており、活力に満ちた実践に裏打ちされた労作ということができる。2005 年２月２日に行われた公開口頭審査においては、まず、第１章における総論が日本に限定されていることへの疑問や、第２章における竹楽器の記述が資料として重要である反面、データとしてのいっそうの充実が求められること、第４章における「将来像」が個々の事例の列挙にとどまっており、全体像の提示が行われるべきであったこと、などの指摘が行われた。また、学問的な新しい知を探求するという、研究としての本来の性格にやや乏しいこと、第３章に示されている新たな音楽芸術について、その内容についての記述が十分でないこと、さらに、実践の報告を超える、現場での状況への批判や提言も必要ではなかったかなど、いくつかの問題点が挙げられたが、申請者はこれらの問いに対して的確に答え、また今後の展望を示すことができた。本論文は、事例報告的な部分も少なくないために、より緊密な記述が求められる面も残しているが、竹という、音楽学であまり主題化されることのなかった対象に総合的に取り組み、今後における芸術創造および芸術活動の可能性への具体的な指針を示すことができた点は高く評価されうる。よって本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。